

Hib（ヒブ）ワクチンをお勧めします!! 乳幼児髄膜炎の予防!!**待ち望まれた細菌性髄膜炎を予防するワクチンです。**

アメリカはもちろん、アジア・アフリカを含む世界各国で導入され、WHOの推奨により120カ国以上で公費負担による接種が行われています。残念ながら日本では公費負担ではありません。

ヘモフィルス-インフルエンザb型菌 (Hib:Haemophilus influenzae Type b) は、「インフルエンザ」という言葉を含んでいるので紛らわしいですが、日本を含む北半球世界で冬にインフルエンザの大きな流行を起こすインフルエンザウイルスとは関係ありません。

ヘモフィルス-インフルエンザb型菌は、髄膜炎や肺炎などを起こす病原体の細菌です。

アメリカ合衆国や欧米の先進国では、ヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib)感染症の半数以上を髄膜炎が占めています。その他のヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib)感染症としては、喉頭蓋炎、蜂窩織炎、関節炎、肺炎、敗血症などがあります。これに対して、発展途上国では、ヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib)感染症としては肺炎が多く、子どもの細菌性肺炎による死亡で第2位の病原菌となっています。

WHOによれば、ヘモフィルス-インフルエンザb型菌により、全世界で、毎年、300万人以上の患者が発生し、386,000人が死亡していると推計されています。日本では600人が発症、5歳未満の乳幼児の2000人に1人であり、5%は死にいたり、25%は後遺症を残します。



欧米では、このヘモフィルス-インフルエンザb型菌の定期予防接種が乳幼児に対して行われています。ヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib:Haemophilus influenzae Type b)という名前が長いので、単にインフルエンザb型菌と呼んだり、よくHibという略称が使われることがあります。欧米で予防接種を受けたお子さんの予防接種の記録などで、このHibという略称を見ることがあります。日本でもワクチンの認可があり、接種可能となりました。

ヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib)感染症の約85%は、0-4歳の乳幼児で見られます。ですから、乳幼児で特に注意すべき感染症です。また、老人や免疫が抑制された人々でも、重症となり命にかかわるような場合があるので注意が必要です。

◆Hibワクチンを受けるべき人と時期は？**Hibワクチンは、5歳以下の乳幼児全員に受けていただきたいです。**

3種混合(DPTワクチン)と同じ日に計4回接種をおすすめします。なるべく生後7ヶ月までに3回の接種を終わらせましょう。そのためには、生後3ヶ月になったらすぐにHibと3種混合の同時接種、1週間後にBCG接種、その後も3種混合接種の際にHibワクチンを同時接種がお勧めです。3種混合をすでに開始されたお子さんについては接種スケジュールを相談ください。

接種スケジュールは初回の接種を始めた年齢により異なり、年齢が大きくなるにつれて、接種回数が合計3回、合計1回と減ります。

7ヶ月未満で開始……3回+1回(1年後)の合計4回
7ヶ月～1歳未満で開始……2回+1回(1年後)の合計3回
1歳以上で開始……1回のみ

一回の接種の料金は、7500円です。

◆接種に際してしていただきたいこと

日本は、BSE(牛海綿状脳症)発生国原産のウシに由来する成分を医薬品の原料として使用しないことと決めています。このワクチンは現時点ではその取り決めに反した原料を使用しています。

しかし、欧州薬局法委員会からは医薬品製造に適している原料であることの証明書が発行されているようで、本ワクチンによってTSE(伝達性海綿状脳症)が伝播する可能性は極めて低いと考えられています。Hibワクチン接種によってTSEが伝播する理論上の危険性と、接種により得られる利点をご理解の上で接種していただきますようお願いいたします。

※医療法人順秀会 東山内科小児科・東山健康管理センターと スカイル内科・スカイル健康管理センター 及び 星ヶ丘内科・小児科とは、診察時間が異なります。診察時間と各科専門医師の分担表を表面に記載してあります。

※24時間対応コンピュータ予約システム(電話・インターネット・携帯電話・i-mode対応)

- ◆医療法人順秀会 homepage: <http://www.junshu.jp>
- ◆健診結果・医学的内容に関するご質問は: med@junshu.jp
- ◆メンタルヘルスケア(心の相談窓口)心療内科への相談は: mind@junshu.jp(新設)
- ◆検査予約・検査料金や医療事務に関するお問い合わせは: info@junshu.jp